

## V. Woolf, *To the Lighthouse* 小論

—現実と幻影のはざまで—

町田敦子

### 第1章

Virginia Woolf (1882~1941) は、周知のように “stream of consciousness” (「意識の流れ」派) を代表する作家である。次々と作品を書いてゆく中で、彼女はその手法を実験的に少しずつ変えていった。井内雄四郎、大社淑子両氏は、*To the Lighthouse* (1927)、*The Waves* (1931)、*Mrs. Dalloway* (1925) の三作が、「Woolf の代表作であるばかりでなく、イギリス文学史上、いな世界文学史上、永遠に名をとどめる名作だと言っても過言ではない」<sup>(1)</sup>と評価し、更に次のように述べている。

では、何ゆえに Woolf の作品は、これ程までに美しく、感動的で、卓越しているのでしょうか。それは、一つには、見事な成功を収めている果敢で野心的な技法上の実験の為であり、また一つには、透明で流麗な文体を築き上げている豊かな抒情と、剃刀の様に研ぎ澄まされた鋭い感受性の為であろう。<sup>(2)</sup>

“stream of consciousness” と呼ばれるこの手法は、「印象派」、「象徴主義」の方法と深くかかわっており、“interior monologue” (「内的独白」) を駆使することによって、人間の内面的な変化、無意識下での心情の移ろいを、それがあままに文字の上に描き出す手法といえる。つまり、外面的な目に見える事象ではなく、目には見えぬ内面的な微妙な心象の変化を、Woolf はより重視したわけである。ここで、Woolf が1919年1月20日に記した日記の一節に注目したい。

このやり方の利点は、もしためらえば捨て去ってしまうようなあれこれの、ばらばらな事柄をひょっとしたはずみで拾いあげる、というところにある。そうした事柄はごみの山にあるダイヤモンドな

のだ。<sup>(3)</sup>

ここで述べている「このやり方」というのは、文章を速い速度で書き上げることである。そうすることで彼女は、「今だかつて表現されたことのない、おびただしい数の知覚が、中心であり、また合流点でもある」<sup>(4)</sup>ところのあらゆる瞬間というものを、また、「表現しようとする我々よりは、当然のことながら、常に、はるかに豊かなもの」<sup>(5)</sup>である人生というものを、表現しようとしたのであろう。それは、その存在に気付かなければ、他の無数の石ころに紛れて埋もれてしまい、永遠に目に止まることなく忘れ去られてしまう。だが、注意深くそれを見つめ、磨きをかければ、信じられないような鮮やかさで甦り、人の心を捕らえて離さない。Woolf が描きたかったのは、まさにこうした「何気ない日常の中にある真実」であり、それらの小さな一瞬一瞬こそが彼女にとっては「ダイヤモンド」だったのである。

以上みてきたように、*To the Lighthouse* は、こうした彼女自身の信じる「真実」が、あますところなく描き出された傑作といえる。

*To the Lighthouse* では、三つの時間がそれぞれ三部構成の形で繰り広げられている。音楽的観点から見た場合、ソナタ形式をとっているとは往々にして指摘されるところであるが、ここでは更に作品の細部に注目してみたい。Woolf は、この作品の中でしばしば聴覚によって感受する、「音」を駆使した表現を用いているのである。

And now as if the cleaning and the scrubbing and the scything and the mowing had drowned it there rose that half heard melody, that intermittent music which the ear half catches but lets fall ; a bark, a bleat ; irregular, intermittent, yet somehow related ; the hum of an insect, the tremor of cut grass, dis severed yet somehow belonging ; the jar of a dor beetle, the squeak of a wheel, loud, low, but mysteriously related ; ...<sup>(6)</sup>

この様に延々と「音」を表す描写が続く。これらは気が付かなければそのまま過ぎ去ってしまうような些細な瞬間の一つに過ぎないが、ある

情景を、「音」という、人間が営む生の構成要素のひとつから眺めることで、こうも美しく、ひとつのハーモニーとして、またひとつの絵画として、読者である我々に展開してみせるのである。

更に、“stream of consciousness”という独特の文体が醸し出すリリカルな、詩の様なある一定のリズムもまた、それぞれの楽章の中において、音楽的な流れを感じさせるのにあずかっている。それらは、取り留めもなく浮かんでは消えてゆく、人間の心情の移ろいを、あるがままに表現している。従って、一つ一つの文章が、大変短く、文章という形にした時に前後の脈絡を欠く様に感じられてしまうことさえある。Woolf 文学が難解と評される所以であるといえる。しかし、彼女の作品が、読み込んでゆく度毎に少しづつ心に迫ってくる感じ、何かもやが晴れてゆく様に心にピタッとくる感じ、この不思議な感覚へと我々を誘い込むものは、一体何であろうか。

ともあれ、こうした三部から成るソナタ形式と、音による情景描写、文章自体が持つリズムミカルな流れとがあいまって醸し出す音楽性を、*To the Lighthouse* の主要素と感じずにはいられない。

次に、いま挙げた音楽的要素とならんで指摘すべきは、この作品の絵画的要素である。Woolf 文学が、作品全体として読者に訴えかけてくるものは、一見かなり曖昧である。つまり、絵画の手法に例えていうならば、写実主義的ではなく、印象主義的なそれであるといえる。このことは、彼女が“Bloomsbury Group”(「ブルームズベリー・グループ」)という、上流階級にそのメンバーが属し、その殆どが(Woolf と姉 Vanessa を除いて) Cambridge に学んだという知的グループに属していたことと深く関係する。彼らの職業はそれぞれ異なっていたが、それぞれが違った形で、芸術という世界に生きていた。そして彼らは揃って、19世紀後半のフランス後期印象派の画家達に、大きく影響を受けたのである。この様な中で、表現方法こそ違いながらも、それぞれが、絵画、小説文学、伝記文学、美術批評、文学批評など異なる分野で、異なる芸術の形を用いて、印象主義という共通理念を具象化していった。従って、Woolf の小説に、そうした特徴が見られるのは当然の成り行きともいえるのである。

ここで、Woolf が彼女自身の回想記の中で述べている興味深い一節を引用したい。これは、子供の頃滞在したセント・アイヴスの別荘で、壁

につたう花を見ていた時の回想である。

もし私が画家だったら—（中略）—私は球形の半透明の絵を書くだろう。—（中略）—反り返った形を、光が中を通ってくるのを示すが、明瞭な輪郭をつけずに描くだろう。あらゆるものは大きく、ぼんやりしていて、目で見えるものは同時に耳に聞こえることになる。音はこの花びら、或はこの葉を通して聞こえてくるのだ——視覚と区別し難い音が。音と視覚とは、これらの最初の印象の等しい部分を為しているように思われる。<sup>(7)</sup>

漠然とした表現ではあるが、しかし何と心惹かれる一文であらうか。確かに彼女は画家にはならなかった。だが、ここで Woolf が述べていることが、そっくりそのまま彼女の小説の在り方に通じることに気付く。そして、作中、重要な役を担っている女流画家、Lily Briscoe の存在に対する一つのヒントをも、ここに見付けることが出来るのである。Lily は、様々に苦悩しながら結局10年という歳月を経た後、一枚の絵を完成させる。Woolf は、その一枚の絵の完成への過程と、登場人物達の周囲の人々に対する新たな認識の獲得までの過程とを、見事に交錯させたのである。こうして Woolf は、形骸化した言葉に頼ることなく、あるがままの抽象的な形で表現することで、説明し難い人間の生を、我々自身に考えさせたかったのではないだろうか。絵画を小説に取り込むという芸術の二重奏が、ここでも一つの優れた効果をもたらしている。

こうして、芸術という総合的な美の観点から捕らえても、我々の心に素晴らしい残像を残す Woolf 文学の真髄は、大沢実氏による次の言葉に集約されよう。

我々はここに、心理と音楽と絵の殆ど完全に近い調和を見い出す。—（中略）—つとに、限られた言葉の範囲の中に形象の美を支配することを知った作者は、今まざまざと、言葉のニュアンスとその反響の秘密を学びとったかの様に見える。<sup>(8)</sup>

## 第2章

### I

我々は、Ramsey 夫人の人間像を、登場人物達と夫人自身という二つの視点から、窺い知ることが出来る。

...she was unquestionably the loveliest of people (bowed over her book) ; the best perhaps ; ...<sup>(9)</sup>

これは、画家の Lily Briscoe が述べている言葉である。Lily は Ramsey 夫人の魅力を十分認めており、自分は夫人には多くの点でかなわないと承知している。

又、同じく別荘の招待客の一人である青年 Paul Rayley は、次のように考える。

She had made him think he could do anything. Nobody else took him seriously. But She made him believe that he could do whatever he wanted.<sup>(10)</sup>

彼はこのように、夫人に対して絶大なる信頼感を寄せている。Paul は夫人の励ましによって自信を持ち、自らの望むことを達成するのである。そして、夫人の八人の子供達が、招待客の一人である Charles Tansley をからかった時の描写はこうである。

..., as they sat at table beneath their mother's eyes, honour her strange severity, her extreme courtesy, like a Queen's raising from the mud a beggar's dirty foot and washing it, when she thus admonished them so very severely about that wretched atheist...<sup>(11)</sup>

子供達はこの様に母親でありながら、崇高ともいえるその姿に圧倒されるのである。そして、世界中に自分達の母親の様な人は一人しかおらず、この様なかけがえのない人を母親に持つという巡り合わせに、

心から幸福を感じるのである。以上、三者による Ramsey 夫人の印象から、我々は作者自身の母 Julia Prinsep の人物像をも改めて窺い知ることが出来る。そして、Woolf は、その他十人以上の登場人物達に Ramsey 夫人について語らせることによって、我々読者にその人物像を自由に想像させることに成功している。それは、野中涼氏の述べる様に「ひとつのものは、いわば、無数の面を持って具象化する」<sup>(12)</sup>という信念に裏付けられている。こうして、Woolf は複数の目で、即ち複眼的に母親を描き出すことで、おそらく彼女自身がより冷静な目で自らの母を見つめようとし、又母に対する永遠の思いを整理しようとしたのではないだろうか。

Woolf は、回想記『存在の瞬間』(*Moments of Being*, 1976) に収められている「過去のスケッチ」の中で次の様に述べている。

私が四十代になるまで—(中略)—母の存在が私につきまとった。  
—(中略)—彼女はとどのつまり日常生活の中で非常に重要な役割を果たしている目に見えない存在の一つだった。  
—(中略)—(*To the Lighthouse* の執筆中) パイプからシャボン玉を吹き出す様な感じで、私の心から吹き出してくる思想や情景が次々と群れをなしてゆく。—(中略)—そしてそれが書き上げられた時、母にとり憑かれることがやんだのだ。もはや母の声は聞こえず母に会うこともなくなった。<sup>(13)</sup>

母 Julia が亡くなった時、Woolf はまだ僅か13歳の少女であった。幼いうちに母を失ったことで、彼女に対する Woolf の愛情は決定的なものになったといえる。そして、時間の経過と共に、その姿は何者も手の届かない高い存在へと変わっていったのではないか。おそらく Woolf は、常に母と一緒に生きていたのだ。こう考えてくると、改めて *To the Lighthouse* において自らの母、それも他のどんなものよりも深く愛し大切に思った母の姿を、あれ程冷静に、かつ客観的に描き出した Woolf の創作に対する姿勢に驚嘆せずにはいられない。

Woolf は、評論『私ひとりの部屋』(*A Room of One's Own*, 1978) の中で Charlotte Brontë (1816-1855) の *Jane Eyre* (1847) を批評して、天分はありながらも、自らの人生で運命と戦っている様子が作品に出て

しまい、冷静に描けていない、従って文学作品としては失敗に終わっている、と書いている。自らの父親像、母親像を作品として描き出そうと決心した時、Woolf は決して同じような過ちに陥ってはならないことを知っていたに違いない。Woolf が *To the Lighthouse* を出版したのは、Leonard Woolf (1880-1969) と結婚してから15年後、換言すれば、約30年に及ぶ二人の結婚生活のほぼまん中の時期にあたる。彼女がこの時期に父母の姿を描出したのは、Leonard との結婚生活が彼女の心境に少なからず影響したのだとはいえないだろうか。両親の結婚生活に対し自分なりの考えを持ちながら、自らも夫婦という立場に身をおいた今、彼女には夫婦という形が新たに见えてきたのではないか。

我々が一つのことを認識する力は非常に曖昧である。視点を變えることで、物事の見え方は大きく変わってくる。それが、作中の Lily の言葉として吐露されている箇所がある。

...so much depends, she thought, upon distance: whether people are near us or far from us;<sup>(14)</sup>

Woolf が、次第に父母から時間的に遠く離れてきたことと、Leonard との理解と愛情に裏打ちされた結婚生活を送っていたことが、*To the Lighthouse* 執筆の動機となったといえるのではないだろうか。母への追憶を強めたものは、母とはあまりにも掛け離れた父 Leslie の存在であった。もしも父が、優れた知性と共に、母の持つ優しさの両方を少しでも兼ね備えた人物であったなら、おそらく *To the Lighthouse* は、父の肖像を中心に描かれていたのではないだろうか。それも、彼を成功者として描きながら。

James が燈台へ行きたかったというその気持ちは、充実した幸福な人生を生きたいという Woolf の心そのものである。Ramsey 夫人は James に「お天気になったら行けるわね。」「朝になったら鳥が鳴いているかもしれないわね。」<sup>(15)</sup> と言ってくれた。だから、母 Julia もおそらく今の Woolf に、「きっと大丈夫よ。」「あなたなら出来るわ。」、そう言ってくれるに違いないのである。数多くの不安、困難、悲しみ、それは作家としての苦しみでもあり、精神状態への不安でもあり、諸々の俗事への苦悩でもあるが、それらが存在する厳しい現実を生きている Woolf は、何

か自分を勇気づけてくれるもの、そして心の安らぎを与えてくれるものが欲しかった。母と共に生きていた遠い過去の幸福な時代にすがりつきたかった。Woolf は、*To the Lighthouse* の中に母の肖像を描くことで、母の幻影を断ち切りたいという思いと同時に、母の温かさにもう一度触れたかったのだ。そして何よりも、幸福と希望を与えてくれる母に、もう一度出会いたかったのである。

## II

次に、Woolf の父 Leslie Stephen の肖像ともいうべき Ramsey 氏の姿を映し出してみたい。物語が始まってすぐに、Ramsey 氏の性格を如実に表す文章がある。

Had there been an axe handy, a poker, or any weapon that would have gashed a hole in his father's breast and killed him, there and then, James would have seized it. Such were the extremes of emotion that Mr Ramsay excited in his children's breasts by his mere presence; standing, as now, lean as a knife, narrow as the blade of one.<sup>(16)</sup>

Ramsey 氏は、僅か六歳の幼い息子 James にこの様な激しい気持ちを抱かせてしまう人物であった。James がこの様に思ったのは、楽しみにしている明日の燈台行きに対して Ramsey 氏が「明日の天気はまずいぞ。」<sup>(17)</sup>と言った時である。幼い彼にとってこの燈台行きは、彼自身の生きる世界そのものであり、燈台に明日行けるかどうかは、彼にとって人生が希望に満ちたものになるか否かに匹敵する重大事だったのである。子供の世界とはそういったものであることを知っている Ramsey 夫人が、希望を持たせようとする一方で、Ramsey 氏には、そのような夫人の気持ち、ましてや幼い我が子の気持ちは理解し難いものであった。彼にとって大事なことは、子供達に「人生こそ他の何にもまして、勇気、真実、忍耐力を必要とするものだ。」<sup>(18)</sup>ということを現実の生活の中で思い知らせることであった。しかしその一方で、Ramsey 氏は真実を追求するあまり、しばしば悲観的な気分にとらえられ、自分は人生の敗北者であると感じる。そしてこの様な時、彼が同情を求めて頼ってゆく先はやは



り Ramsey 夫人以外にはなかった。Ramsey 氏は夫人の優しく穏やかな態度にふれて、心を充たされ勇気が湧くを感じ、更にその気高く美しい姿に魅了されるのである。しかし、夫人がふとした瞬間に見せる非常に厳しい表情に、彼は気付いていた。

It saddened him, and her remoteness pained him, and he felt, as he passed, that he could not protect her, and, when he reached the hedge, he was sad. He could do nothing to help her. He must stand by and watch her. Indeed, the infernal truth was, he made things worse for her.

Ramsey 氏は、夫人や子供達に威圧的な態度をとり、一見彼がその場を支配したかのように見えながら、時折見かける夫人の姿によそよそしさ、哀愁、近寄り難い高貴さを感じて夫人に対して深々と頭を下げるのであった。Ramsey 氏は、反発を感じながらもやはり妻の愛情の中で生きていたのである。彼自身の心を満たし、彼の人生を意味あるものにしたのは、彼が頑なに信じ、求め続けた「真実」でもなければ、彼が築き上げて来た数々の「業績」でもなかった。それは唯一つ、Ramsey 夫人の自己犠牲に裏打ちされた愛情であった。橋口稔氏の述べる様に「小説に書かれた父親像をそのまま Stephen 像と考えるのは早計である」<sup>(20)</sup>かもしれないが、こうした Ramsey 氏の姿は、多くの点で父 Leslie に対する作者自身の思いを確かに伝えている。James が父 Ramsey 氏に対して抱いた憎しみは、Woolf が彼女の父に向けた憎しみでもあり、怒りでもあった。James が、六歳の時に抱いた、ナイフで父の心臓を突く、という激しい気持ちを、そして、「燈台には行けっこないさ」と言った父の言葉を、彼は十年という歳月を経た後も、決して忘れてはいなかった。Woolf にとって父 Leslie は、彼の死後約二十年経ち、彼女自身も既に四十歳を越えていたにもかかわらず、依然として、脅威的な、恐ろしい存在だったのである。その感情は、もはや無意識的に Woolf の心の深層に長い間とどまっていたものといえる。このことは、Woolf が *To the Lighthouse* を出版した翌年の1928年11月28日の日記からも察することが出来る。

父上の誕生日。— (中略) —そして他の知人の様に九十六歳にな

り得たかもしれないのだが、有り難いことにそうはならなかった。彼の人生は私の人生を完全に消し去ってしまったろう。何が起こったろうか。書き物もなし。本もなし。——考えられないことだ。<sup>(21)</sup>

ところで、Woolf に格式の規範とさえ呼べるものを要求したのが父であれば、自由を尊重し、主張したのもまた父であった。規範と自由という、一見相対立する二つの精神の位相を求めた父 Leslie の教育。自由を尊重する父のもとにしながら、その父の威圧的な存在ゆえに自由を享受出来なかったという辛いジレンマ。このような父 Leslie の生涯は、ほぼ Victoria 朝と共に始まり、その終焉と共に終わった。Leslie の内なる Victoria 朝的精神が、娘に格式的規範を求め、その一方で、娘に自由な思想の必要性を説いたのは、彼の中に次の20世紀的な時代精神に通ずるものが存在したためではないだろうか。

ともあれ、こうした抜群の教養があり、また厳格な規律を重んじた父との生活は、決して快いものではなかった。Woolf は回想記の中で「父の著書の中に非常に明白に表れている批評と創造の能力の不釣り合い」<sup>(22)</sup>を指摘している。このことは、学問における分析や思想には優れた才能をもちながらも、そこに人生や人物という要素が加わると、せっかくの卓越した知性も役に立たなくなってしまうことを示唆している。この様な、父の学問的才能と実生活を送る能力との格差が Woolf を苦しめた。そして、結果的に父に対するアンビヴァレントな感情をひき起こしたのである。

ここで、作品の第三部で、Ramsey 親子が十年振りに別荘を訪れ、以前遂行しえなかった燈台行きを執行しようとする場面を思い出したい。船の漕ぎ手を務める James と姉の Cam は二人とも、若者に成長している。そして、それぞれが父に対する思いのために、心中、葛藤を繰り広げていた。Cam は、決して父に屈服してはならないという密約を、James と交わしながらも、年老いた父の姿を見ているうちに、父への頑なな嫌悪感が揺らぎ出し、一方、James は、父に屈服しそうな姉を見ているうちに、かつての母の表情を思い出し、改めて父の横暴に対して怒りに燃えるのであった。

She'll give way, James thought, as he watched a look come upon

her face, a look he remembered....and then somebody sitting with him laughed, surrendered, and he was very angry. It must have been his mother, he thought,...<sup>(23)</sup>

しかし、その James の心が、とうとう揺らぎ出す時が来た。彼が、生まれて初めて父から誉められたのである。

‘Well done!’ James had steered them like a born sailor.

There! Cam thought,...You’ve got it at last.<sup>(24)</sup>

おそらく無意識ながらも、Woolf には、父の存在を別の形で認識する必要性があったのである。到底、相いれるところのなかった父の姿は、彼の死後もずっと Woolf の心の中に暗い残像として残った。James が Ramsey 氏に誉められ、初めて長い間の父への大きなわだかまりをなくした様に、Woolf も父に誉められたかった、少なくとも認められたかったのである。この Ramsey 氏の ‘Well done.’ という言葉がどれ程 Woolf にとって大きな意味を持つものであったか、その心映えがどれ程 Woolf の求めていたものであったか。‘Well done.’ というこの言葉には、Woolf の様々な思いが込められているように思えてならない。これは、実際には父 Leslie から言われることは決してなかった言葉であろう。それを敢えて Ramsey 氏に語らせながら、Woolf は、父に対する憎悪の念から救われたかったのではないだろうか。威圧的な存在であったがゆえに憎んだ父であるから、その父を許し、認めることで、初めて、Woolf はその幻影から解放されるのであろう。

### III

こうして、Woolf は、父と母それぞれへの異なる思いを、執筆という行為によって彼女自身の中で昇華させていった。そして更に、両親の姿を描き出しながら、そこに自分自身の歩んで来た人生をも見出ししているのである。Ramsey 夫人が次のように述懐する場面がある。

When she looked in the glass and saw her hair grey, her cheek sunk, at fifty, she thought, possibly she might have managed things

better her husband ; money ; his books.<sup>(25)</sup>

更に、Ramsey 氏について書かれているもう一文を引用してみたい。

He Would always be worrying about his own books will they be read, ate they good, why aten't they better, what do people think of me ?<sup>(26)</sup>

この二つの文章は、おそらく父母の肖像というよりむしろ Woolf の自分自身に対する気持ちを表現したものであると考えられる。四十歳を過ぎ、人生の半ば辺りにさしかかった Woolf は、これまで生きて来た足跡を振り返り、自分は様々なことにもっとうまく対処してこれたのではないかという、悔恨と焦りに似た思いを抱き続けていたのではないだろうか。事実、時々精神的不調に苦しんでいた Woolf ではある。引用中、「鏡をちょっとのぞいて」とある一文は、現実の生活の中での Woolf 自身の感慨だったのかもしれない。そして、自著についての批評に大変神経質であったことは、彼女の日記やエッセイからも窺える通りである。彼女のあるエッセイにこんな一節がある。

「天才ならば自分について何と言われようと、超然としているべきではないかとおっしゃるならば、それはそれでよい。けれども、不幸なことに、自分に寄せられる批判をもっとも気に病む人々は他にもない、男女を問わず、天才なのである。—（中略）—文学には他人の意見を気にするあまり理性を失った人々の残骸が散らばっているのである。」<sup>(27)</sup>

Woolf は続けて、創作行為に最も好都合な精神状態とは、白熱し、何一つ妨げを受けない精神状態であると説き、それゆえに「芸術家のこの過敏さは二重の意味で不幸である。」<sup>(27)</sup>と記しているが、このあたりの描写には圧倒的な迫力がある。才能がありながらも、自分の仕事に満足しきれず、偉大な業績に見合った評価をも得られなかった父の姿に、Woolf は同じ文筆活動に携わる自分自身の姿を重ね合わせたのかもしれない。思い通りにならない人生航路にあって、Woolf の心の中には、常に父と

母の幻影が存在した。不断に彼らの姿を意識していた Woolf にとって、彼らの姿を見詰め直すということは、即ち、自分自身を見直すことに他ならなかったのである。

作品中の Ramsey 夫妻は、お互いに様々な感情を心に秘め、時には全く対立しながらも、時には相手に対して優しい気持ちになるのである。その様子は、画家の Lily が言う様に、夫人があまりに与え過ぎであったり、Ramsey 氏があまりに自己中心的であったりと、決して終始幸福なものではなかった。にもかかわらず、夫人は、「結婚しない女性は、人生の最上の部分を取り逃している。」<sup>(28)</sup>と強く主張するのであった。何故、夫人は結婚に対してそのような信念を持っていたのだろうか。また、対照的な性格を持つ両親の結婚生活を見て来た作者自身は、結婚に対してどのような認識を持っていたのだろうか。Woolf の回想記『存在の瞬間』に収められている「思い出すまま」の一節に注目したい。

これ程対等でこれ程常に勇敢な組み合わせはなかったと思われる夫婦でした。— (中略) —今見ると彼女が余りにも妥協していると私達に思われることや、正当さ、寛容という点からは厳密な考慮を払わないで彼に強要されたものもあるにはあったにしても、— (中略) —やはりそれは勝利の人生であり、一貫して高いものを目指していた人生であったというのが事実でした。<sup>(29)</sup>

作品には、Ramsey 夫人の勝利や、Ramsey 氏の敗北を意味する部分が何箇所か見られるが、結婚生活という一つの結合の形としてとらえた時に、父母の人生は、まさにここで述べられている様に、「一貫して高いものを目指した人生」であったと、Woolf はとらえたのである。Ramsey 氏が、妻の愛情によって救われたように、Ramsey 夫人も夫がほんの時折でも見せる思いやりによって、彼の力を認め尊敬する気持ちを抱いていたに違いないのである。二つの異なる性質を持った者同士が、互いに相手を受け入れ認め合う、即ち、それぞれの存在価値を認め合うことだが、このことが、双方の持つ生きる力というものを数倍にも増大させると同時に、個として存在する以上に、人生を豊かなものにすることすら出来るのである。そして、それは生きるということのより深い意味を探ることでもあろう。より高次元のものを目指す過程では、必ず苦しみが伴う

ものだが、他を拒否し、他を受け入れない人生は、閉ざされた、発展性のない人生だといえよう。Woolf が、彼らを勇敢だったということの意味はそこにあるのではないだろうか。以上のことは、Woolf の基本理念にある弁証法的な考え方に基づくものであり、彼女の結婚に対する認識の中枢をなすものだといえよう。

こうして、Woolf は両親の結婚生活を、最終的には肯定し、彼らの人生が立派なものであったと認めている。この様な Woolf の心情は、現在こうして生きている自分の人生に対する肯定であり、これまで歩んで来た道が決して間違っていないかったということを、確証するものであったのだ。

*To the Lighthouse* の出版から四年後 Woolf は、『タイムズ文芸付録』(Times Literary Supplement) が彼女の作品としては初めて高く評価し、また、夫 Leonard が彼女の最高傑作と評した *The Waves* を出版している。*To the Lighthouse* の執筆によって、不自然にまとわりついていた空気を一掃し、新しい穏やかな空気を胸に吸い込んだ Woolf。こうしたことが、その後の優れた作品を生み出す原動力のひとつとなったことは、もはや疑いないであろう。

### 第3章

一般的に小説を書くということは、自己表現の手段であり、また人生を見つめる手段でもある。そして、Woolf 文学にふれた者は、とりわけそこに「現実」や「真実」と呼ばれるものを追求し続ける彼女の姿を見るのである。Woolf は、評論 *Modern Fiction* (1919) の中で次の様に述べている。

現今最もよく行われている小説形式は、我々の場合には、我々の求めるものを補足してくれるよりは失うことの方が多い。それを人生と呼ぼうと、精神と呼ぼうと、真実と呼ぼうと、この本質的なものは逃げてしまう。<sup>(30)</sup>

Woolf は、人生とは「意識の始めから終わりまで我々をとりまく、反透明の外皮である」<sup>(31)</sup>と言う。そして、そういった人生そのものを現在

の小説は少しも描き出していないと言う。一見抽象的とも思われるこの主張は、Woolf が言う様に「ちょっとの間、普通の日の普通の心を調べて」<sup>(32)</sup>みると誰もが必ず思い当たるふしがあるのである。我々は、秒という単位よりはるかに細かい時間の流れの中に生きている。我々は、たった十秒の間に、一体どれ程多くのことを考えるだろうか。その十秒というもの、我々の心はずっと一貫した心象を持ち続けるだろうか。人間の心の動きというものは、とりとめのもののである。瞬間的な心の動きを他人が完全に理解するのは、まず不可能であろう。Monique Nathan 氏は、Woolf の小説について次の様に述べている。

彼女の小説は、彼女自身を露わに出している。— (中略) —彼女でないもの、彼女の好まぬ所、感じない所は表されていない。<sup>(33)</sup>

この指摘は、Woolf 自身の「現実」に対する認識を考えれば、至極当然の指摘であろう。即ち、「現実」に対する一般論などあり得ないのであって、それは、各人各様のもの、千差万別のものなのである。「現実」に則した文章を書くことを望んだ Woolf が、彼女の感じるところのもののみを描いたのは、それが彼女のいう現実であったからに他ならない。真に嘘や偽りのないものを描こうとするならば、自分の書きたいこと、つまり自分だけが持ちうる、または知りうる心象の流れ以外に何が書けようか。これが、Woolf が作家として、我々一般読者に対して示した誠意でもあり、また Woolf の自分自身の人生に対する誠実な心でもあったのである。

こうした Woolf の「真実」を探求する姿はしばしば苦し気であり、また危うさをも覚える。*To the Lighthouse* の中に次のような一節がある。

It was a miserable machine, an inefficient machine, she thought, the human apparatus for painting or for feeling ; it always broke down at the critical moment heroically, one must force it on.<sup>(34)</sup>

「真実」の探求は、壊れやすい心を持った彼女にとって、普通の人以上に厳しいものだったはずである。それは、大きな勇気と不断の努力が必要としたに違いない。人間の内面へと目を向けたことが、現実からの

逃避であるという見方も一部にはあるかもしれないが、果たしてそうであらうか。Woolf は、誰もが目にする「見せかけ」に惑わされることなく、自分が信じる「現実」から、決して目をそらさなかった。そこには、もはや作家という枠念を越えて、一人の人間の真摯に生きる姿がある。自己との苦しい戦いを強いられながらも、Woolf の目は常に前方にある未知の時空へと向けられていた。物事の本質を問い糾す気持ちを決して疎かにせず、その探求の結果、我がものとした価値観が Woolf の人生を、より高いものへと指向し続ける人生にしたのだと考えられる。それは確かに、前進する、前向きな人生であった。

奇しくも、今日我々は曖昧さという言葉をよく耳にする。それは、Woolf 文学に感得される曖昧さとは、また別の背景をもつ言葉ではあろう。現在、社会・技術は、めまぐるしく発展して、更に多様化し、莫大な広がりを見せている。それは殆ど混沌とした世界ともいえる。我々の言う曖昧さは、こうした世界に対する我々自身の不安な心の産物なのかもしれない。*To the Lighthouse* は、我が同胞に対する理解をはじめとし、日常当然と考えたり、理解したつもりになっている事柄が、いかに曖昧な認識のもとに成り立っているかを再認識させ、謙虚にして真摯な生き方を促す警鐘の書ともいえよう。

以上、Woolf の人生が色濃く反映された作品 *To the Lighthouse* を通じて、彼女の研ぎ澄まされた感性に遠く及ばないながらも、彼女の人生を自分なりに研究してきた。最後に、Woolf の、終始変わらぬ思いを表した一文を引用してペンを置きたい、自戒の念を込めて。

Who knows what we are, what we feel?

Who knows even at the moment of intimacy.<sup>(35)</sup>

### Notes

1) 井内雄四郎、大社淑子、『現代イギリスの女流作家たち』（評論社、1979）p. 16

2) *ibid.*, p. 1

3) ヴァージニア・ウルフ、『ある作家の日記』（神谷美恵子訳、みすず書房、1976）p. 11

4) 大沢 実編、『ヴァージニア・ウルフ 20世紀英米文学案内10』（研究社、1966）p. 192



- 5) *ibid.*, p. 192
- 6) Virginia Woolf, *To The Lighthouse* (Grafton Books, 1977) p. 154
- 7) ヴァージニア・ウルフ、『存在の瞬間』（出淵敬子、塚野千晶訳、みすず書房、1983） p. 100
- 8) 大沢 実、『ヴァージニア・ウルフ研究』（南雲堂、1956） p. 88
- 9) Virginia Woolf, *op. cit.*, p. 56
- 10) *ibid.*, p. 86
- 11) *ibid.*, pp. 12-13
- 12) 大沢 実編、*op. cit.*, p. 17
- 13) ヴァージニア・ウルフ, *op. cit.*, pp. 123-124
- 14) Virginia Woolf, *op. cit.*, p. 206
- 15) Virginia Woolf, *op. cit.*, p. 10
- 16) *ibid.*, p. 10
- 17) *ibid.*, p. 10
- 18) *ibid.*, p. 10
- 19) *ibid.*, p. 72
- 20) 橋口 稔、『ブルームズベリー・グループ』（中央公論社、1989） p. 22
- 21) 『ある作家の日記』 pp. 196-197
- 22) 『存在の瞬間』 p. 195
- 23) Virginia Woolf, *op. cit.*, p. 183
- 24) *ibid.*, p. 222
- 25) *ibid.*, p. 12
- 26) *ibid.*, pp. 12-13
- 27) ヴァージニア・ウルフ、『私ひとりの部屋 ―女性と小説―』（村松加代子訳、松香堂、1984） p. 97
- 28) Virginia Woolf, *op. cit.*, p. 57
- 29) 『存在の瞬間』 p. 45
- 30) ヴァージニア・ウルフ、『現代の小説』、『若き詩人への手紙』所収（南雲堂、1986） p. 167
- 31) *ibid.*, p. 169
- 32) *ibid.*, p. 168
- 33) モニク・ナタン、『作品とアルバム』のヴァージニア・ウルフ』（石井康一訳、1984） p. 87
- 34) *To The Lighthouse* p. 208
- 35) *ibid.*, p. 186